

日本の手染め技術の解放の道程

——芸術作品としての「染め」を発信する「SQUARE 染 textile」展の取り組み——

小 林 る り

相模女子大学紀要 VOL.79 (2015)

日本の手染め技術の解放の道程

―芸術作品としての「染め」を発信する 「SQUARE染textile」展の取り組み―

小 林 る り

Unleashing the potential of hand dyeing techniques in Japan: On an attempt to hold an exhibition to show hand dye works as art

Ruri KOBAYASHI

Abstract : Japan is one of the countries where the most diverse techniques of dyeing flourish. It is said that people outside Japan pay much more attention to these techniques. In fact most of the Japanese people are still involved in an old-fashioned category to distinguish the techniques so that they can't identify the possibility to develop a new technique of dyeing, in particular hand dyeing in Japan. Therefore I organized a new group, "SQUARE染textile" (染 means dyeing in Japanese character) with some fellow artists in September 2013. In the group I have tried to hand-dye fabrics with chemical colors, not natural colors to express a new sense of spatial depth in the fiber arts.

In this paper I describe the details of the first exhibition which was held by "SQUARE染textile" group at AC Gallery in Ginza, Tokyo in November 24 to 29, 2014. I argue that I tried to make the exhibition an experimental field to show the fabrics like a painting. Also I argue that the exhibition gave the participants a rare opportunity to both mingle with a diverse group of artists having little chance to communicate each other and develop young artists who are interested in the innovation of hand dyeing techniques.

Key Words : textile, hand dyeing, chemical colors, fabrics like a painting

1. はじめに

2013年9月、私は数人の仲間と「SQUARE染textile」と名付けた会を発足させた。私が発起人となり、賛同人として女子美術大学短期大学部特任准教授の竹中明子、女子美術大学デザイン・工芸科助

教の荒姿寿の2名を加えた計3名でのスタートであった。私たちは、会の第1回企画展である「SQUARE染textile 1展」を2014年11月24日～29日までの6日間、銀座AC GALLERYで開催した。この企画展は、染織＝テキスタイルの分野の中でもとりわけ染めに長年携わってきた3名のアーティスト

が、自らの制作と染めの教育現場でのジレンマを踏まえて、それぞれの思いや目標を具現化して行くための第一歩であった。本稿では、第1回企画展の構想と開催までの経緯をまとめ、そこで展示をした私自身の作品について振り返る。そのうえで第2回企画展の開催にむけての今後の確認事項と方向性について触れる。

2. SQUARE 染textile展について

・SQUARE 染textile展の構想

私が学生の頃（昭和60年代後半）に「染織」と呼ばれていたものは、現在ではほとんどの場合、「テキスタイル」とカタカナで表記されることが多くなっている。染めか、それとも織りかをどちらか一つを専攻に決めなくてはならなかった時代から、今日ではもっと自由に幅広く学べる時代へと変化している。現在は染織するための、化学的な材料も、技法もマシーンも進歩はめまぐるしく、素材も多種多様となっている。そうした各種の進歩や多種多様化によって、さまざまなものが複雑化し絡み合い、すばらしいテキスタイルの作品や製品が生み出されている。

しかし、日本各地、あるいは世界各地で常に開催されているアートとしてのテキスタイル関連の展示会をみると、染めか、織りか、ミックスかという基準でみるなら、作品のほとんどが、ファイバーアート（必ずしも平面でなく、テキスタイルという言葉は繊維のようなモノで構築されたものとして読み替えたカテゴリーのことを意味する）というジャンルに変化してきている。個々の具体的な出品作品を観察しても、一枚の布を「手仕事で染める」行為だけで作られる布は圧倒的に少ない。一枚の布に染めることは、布に物理的に厚みや凹凸（最近流行の刺繍や樹脂顔料などの厚みのある物質）を付けないで、色（染料）を布の繊維に染み込ませて紋様を付けることであると思う。そのようにして染められた作品では、3D画像のように手前に素材が出てくるのではなく、奥へ奥へと、表皮のその先を透視するように、色の奏でる世界が姿を見せる。そこから奥に広がる染料の美しい世界。この染めの多種多様な世界にもっとスポットライトをあてたいと長年私は願ってきた。

関西では染めに特化した展示をしている京都の染・清流館¹というところが有名であるが、関東にはそれに匹敵する施設はみあたらず、一般の人が染

を使うものとしてではなく、鑑賞するものとして目にする機会がほとんど無いのが現状である。普段は存在を忘れられがちな染めの世界にもっと光をあて、一般的にも認知される独立した芸術作品としての地位を確立するためには、やはり地道な情報の発信が必要である。これが、私のSQUARE 染textile展を構想した理由である。

・大きくても小さくても出来ない最適サイズを求めて
“純粋な染めだけの技法で仕上げた一枚の布だけを集めた展覧会”をいずれ企画したいと考えていた私は、展示の方法として画一した規格にするのが望ましいと決めていた。そのためには、パネルに張る方式がもっとも適していると考えていたが、そのサイズや厚みになかなか結論が出ず、長らく悩んでいた。

そうしたなか、2013年3月に前述の京都の染・清流館で開催されたハンサムウーマン19展に行き、荒姿寿氏の作品「呼応する st-1」を見る機会を得た。荒姿寿氏の作品は正方形のパネルが縦に3列、横に3列、合計9枚の同じ大きさのパネルを組み合わせ、大きな正方形にして一つの作品にしたものであった。その作品は染料による糊を使用したスクリーンプリントで版を多重層に重ねて染め抜き、なんとも引き込まれる深淵な蒼が、見方を変えると宝石のように輝き出す不思議を有していた。その表情を最大限に引き出ししているのが、まさに正方形のパネルのサイズと厚みのバランスであった。

「SQUARE 染textile 展」を企画するにあたって重要なポイントが、とくにパネルサイズの規格であると私は考えていた。パネルのサイズは大きすぎると、一目で全体を見渡すことができない。全体を見渡すことができれば、視線が流れ、ディテールの表現を際立たせることができるものの、今度はパネルのサイズが小さすぎると、ダイナミックな表現を得意とする作家が参加しにくくなってしまう。また、額が付くと中身の作品を十分に観察する妨げにもなりうるので、額なしの展示としたいが、そうするとあまり薄いパネルでは物足りなくなる。

しかし、荒姿寿氏の作品「呼応する st-1」を見て、私は直感的にこの作品に使われていたパネルサイズに合点がいったのである。なぜならば、このサイズであれば、一目で全体を見渡せ、かつディテールの表現を近寄って観察しやすいと思われたからである。この巡り会いを機に着想の得られたサイズが、後の「SQUARE 染textile 展」の規格サイズ（図1）となった。こうして、サイズの問題に決着

を見ることで、最初の企画会議がスタートを切ったのである。第1回の企画会議は、2013年秋に都内でおこない、会のコンセプトや会の意義についてなど、

今後の活動の幹となる考えを確認し、初回の展覧会の会期や画廊の選定作業をした。



図1 左から荒姿寿、小林り、竹中明子の作品それぞれ3点ずつ展示した。企画サイズの縦60cm×横60cm×厚み4cmの正方形のパネルに厚みの部分まで染めた布で覆う事で額縁等を使用せずに染めの空間に広がりを持たせるように工夫している。

・「SQUARE染textile 1展」の企画と開催

構想と準備を経て、昨年2014年、ようやく具体化の第一歩として、「SQUARE染textile 1展」(図2)を企画することができた。この企画にあたり、私たちは以下の3点を制作と出品の条件とした。①人の手で1枚1枚染めること、②染める以外に加工をしないこと、③見に来て下さった方が染めを見比べやすいように、同じ規格のパネルに貼ることで、それぞれの技法の違いが明確に比較できること、である。SQUAREという会の名の通りに、全員が同じ規格の正方形のパネルに染めた布を張って、展示をおこなった。このように同じ規格の画面で並べることで、一般の人でも染めの違いから来る面白さを比較して鑑賞でき、それによって日本の手仕事の染の文化に

関心を持つ人びとのすそ野を広げることを期待した。

2014年の第1回展での手染めの技法は、「フラクタル模様を布に再現する夢幻染／小林りり」、「極彩色で胎内宇宙を表現する筒描／竹中明子」、「多色多版で微妙なグラデーションを創り出す染料捺染／荒姿寿」の3種類であった。来場者は延べ約300名。各美術大学関係者、デザイン、工芸、現代美術方面の関係者に広く来場いただくことができた。また、オープニングパーティーでは普段はお互いに会うことのないものづくりの人間たちが、垣根を越えて歓談することができた。ここでの出会いをきっかけとして、ジャンルの違う展覧会の案内をお互いに交わすことで、幅広い情報交換の第一歩が踏み出せたのではないかと考える。



図2 第1回「SQUARE染textile 展」会場風景

3. 作品について

・「見えないモノを見る装置」

私の作品「フラクタル模様を布に再現する夢幻染」についても、作者として言葉を費やしておきたい。唐突に感じる向きが、もしかしたらあるかもしれないが、ノーベル賞の話から説き起こすことを許していただきたい。

2015年10月6日に大村智氏がノーベル医学生理学賞、つづいて10月7日には梶田隆章氏のノーベル物理学賞の受賞が決まった。梶田氏が研究する上で欠かせない施設がスーパーカミオカンデ²である。2002年に小柴昌俊氏がニュートリノを発見しノーベル物理学賞を受賞した研究にも、カミオカンデは不可欠な装置であった。

見る（観測する）ことができなかったニュートリノという物質を構成する最小単位である素粒子を見られるようにしたのが、そのカミオカンデという巨大な施設（装置）である。この見えないモノを見るための巨大な装置には巨大な電球のようなものが沢山整然と並んでいて、そのひとつひとつが実は日本の職人の手仕事の結晶であることを知ったとき、私は大きな感動に震えた。

物理学と芸術は全く違う分野のようで、実は物質との対し方という点で深い共通点がある。このスーパーカミオカンデを「見えないモノを見る装置」となぞらえれば、私の作品もまた「見えないモノを見る装置」だと言えるからである。

1987年に、超新星爆発からのニュートリノを観測したというサイエンス番組で、初めて超新星爆発という言葉は私は知った。その後も何度も耳にしていくなかで、地球上の元素はすべて地球外の塵が寄せ集まったもので、金のように重い元素はたとえば超新星（爆発）のような超高温かつ超高压な条件でなければ創り出されないということを知った³。

こうしたサイエンスについての情報や知識を、私はすべて感覚をめぐる事柄として捉えた。それら情報や知識は、頭のなかの宇宙に再構築されたのだ。私たちが普段目にして手にしている全てのものが地球以外で生成されたものであることにセンセーショナルな驚きを感じた私は、いつかこの驚きを染めで表現しようとイメージを育んでいった。その結果として生まれたのが、「SQUARE 染 textile 1 展」で展示発表した、「超新星 = Supernova⁴」のシリーズである。

・「超新星 = Supernova」3 部作

「お仕事は何をされていますか」と質問されて「染色をしています」と答えると、必ずといって良いほど「草木染めですか」との言葉が返ってくる。「いえ、化学染料で染めています」と答えると、多くの人がなにやらガッカリした表情になることは珍しくない。たしかに、日本の草木染めは繊細で奥深い。志村ふくみ氏⁵の凛とした気品の、強い女性を感じさせる草木染め。吉岡幸雄氏⁶の悠久の日本古来の染色法の古代色の復元により時を超え、千年万年の時を感じずにはいられない草木染め等々。

しかし、超新星爆発を表現しようとした時に、私の頭の中に浮かび上がってきたイメージは、どのように優れた方法で美しく染められた草木染めでも、全く表現できないと私には思えた。現代ではほとんどの繊維製品は化学染料で染められているのが現実だ。「草木染めですか」と質問する人の身につけているものを観察しても、草木染めらしいものは見つけられない。それでも一般のひとたちの脳裏には「染め = 草木染め」のイメージが深く定着している。すでに述べたように、多様な染色文化が存在することが、一般的にはまだまだ認知されていないのだ。だからこそ、「一般の人でも染めの違いから来る面白さを比較して鑑賞でき、手仕事の日本の染の文化に関心を持つ人口のすそ野を広げる」ことが大切なのだろうと考えた私たちは、「SQUARE 染 textile」の会（図3）を立ち上げたのだ。



図3 「SQUARE 染 textile」のWEBトップページ画像

HP <http://textile-sq.com>

<https://www.facebook.com/Square-textile-433236746829730/photos/>

展示発表した私の作品は、「Supernova 1、2、3、」の3部作からなっている(図4-1.2.3)。左から順に、超新星を少し離れて見た地点、近づいて見た様子、中を覗いた感覚、という自分の想像の中での視点の時間経過を辿り、その断片を3箇所トリミングした形になっている。壮大な宇宙の巨大な時間軸のなかで、重なる偶然から地球という惑星がうまれた過程で、遠くの星の残骸のような塵が集まり、この星が形成されたのならば、私たちの体も身の回りの物質も全てが「Made in 遠い宇宙」なのではないか。そうであれば、おなじ「Made in 遠い宇宙」同士でこの狭い地球上で戦争や紛争を起すことがどんなに愚かで悲しい作業であろうか、などと制作の過程で私は思いをめぐらせた。

激しく反応しあう星の最期から生まれた私たちのこの惑星、地球。見たこともない超新星に思いを馳

せた。こうして私の目の前に現れた光景が、この3部作の原画となった。実際には想像を絶する超高温高密度のはずだが、思考のなかではどこか懐かしい故郷のようにも感じられた。激しく反応を繰り返し、死に向いながらも神のように元素を創造していく、ダイナミックな時間のなかで、生と死を繰り返すこのような事象は、人の魂の輪廻のようなものと重なり、生命の色と光というイメージに染まっていったのである。

なお、制作にあたって使用しているテクニックは私自身の開発したオリジナルなテクニックの「夢幻染」である。「夢幻染⁷」とは染料の滲む特性をそれぞれ違った条件で拾い上げ、布の上で水と繊維の毛細管現象などを利用して複雑な滲み模様を発生させる技法である。



(図4-1.2.3) 左から順に、超新星を少し離れてみた地点、近づいてみた様子、中を覗いた感覚、という自分の想像の中での視点の時間経過を辿っている。

・高田洋一氏の言葉から

第1回の「SQUARE染textile 展」について、彫刻家の高田洋一氏⁸の言葉を借りて、会の全体を表現したい。以下は、氏が第1回展を見たあとに寄せてくださったコメントからの引用である。

この染めという分野は、温度や湿度、薬剤の微妙な量の違いなど、制御しにくい化学反応をコントロールしつつ作品化しようとする矛盾する作業に果敢にチャレンジするところに、醍醐味がある分野なのだと思う。技法は、それぞれ異なるのですが、お話を聴いていて、私が興味を感じたのは、お三方の視点と、それが大変「女」的であると、男の私には感じ

られたことである。最近、特に「女性性」や「ナイーブさ」、「自己愛」というものが、「今」という時代を切り抜けるために、積極的な意味を持つものとして、目を惹いているように感じる。三人の視点は、例えば、石のかけらに含まれる1mm角の雲母の光を何十万倍にも拡大して写し取ろうとしたり、女性の内部組織、構造への意識だったり、或いは、超新星爆発で生成される重金属への視線だったり、実は一見、科学的観察の側面も伴いつつも、ある瞬間、彼女たちの内面システムによって感覚的にスライドして、常軌を逸脱した自己表出へ向かっているところが、特徴的であるように感じた。誤解を恐れずに申し上げるならば、ある種のナイーブアートの作品に

出会った時の感覚と共通する精神性を感じる。それは、無垢さとも言えるし、子供のような無邪気さとも映る、でも、それは単なる可愛らしさなどではなく、ズシッと鈍い痛みのような怖さにも通じる人の心の迷路に出会った感じである。理屈と経験で組み立てた男の子の理性からは、遥か遠くにあるものにも感じられた。

このように作者本人も気づかぬ作品の宇宙を言語化していただけたことに、私は感謝している。氏のコメントをつうじて、染色という分野だけにとどまらない交流が、表現の幅を広げるのに大切なことであることをあらためて認識することができた。

4. SQUARE 染textile 2展に向けて

・今後の会の活動について

私たちは、染めというものを仕事にしている人も、そうでない人も、専門家も普通の人も普段と違った視点で染めた布を観察できる博物館のような展示を目指した。既存の展覧会では、伝統工芸、現代美術、テキスタイルデザイン、などが別々のものとして枠組みが作られ、狭い世界での活動となっているが、「SQUARE 染textile 展」では、染めであればその垣根を越えて一挙に展示するという、新しいカテゴリーに基づいた企画になるように努めた。

「SQUARE 染textile 展」のように、「手染めに限定し、比較的小振りの縦60×横60×厚み4cmの同規格のパネル張り仕上げて、ジャンルを超えた作家が一堂に会す」スタイルの展覧会は、国内外でも初めての取り組みであったと言える。この展覧会を通じて、伝統工芸、現代美術、テキスタイルデザインの各世界で活躍する作家同士が風通し良く交流し、刺激しあい、新たな発想の種を創り、日本の手仕事の発展の一助となればと私たちは考えている。また、若い有能な染の作家の発掘と育成も今後は目的としたい。総じて、普段はなかなか交流の無いジャンルの違う作家同士が刺激しあうことで、新しい時代の染めの感性や技術が革新される起爆剤となりうる展覧会に今後ともしていきたい。

2015年3月より、正式に現代美術作家2名をコアメンバーに迎え、現在は、2016年2月15日～20日に開催するSQUARE 染textile 2展を開催するための企画会議を重ねているところである。SQUARE 染textile 2展ではさらに各方面に声を掛け、伝統工芸の分野の作家や現代美術の作家、若手作家を含む

11種類の手染め技法を一同に展示することになっている。また、ひろく広報をおこなうためにも、銀座もとじ、日本テキスタイルデザイン協会、田中直染料店に協賛していただけることになっている。

私たちはインクジェットプリントや、転写プリントではなく、手仕事で染める、染め抜かれた布の美しさをもう一度日本人の心に届け、海外にも届けたいと考えている。「潔く、染め抜く。染めた布の奥深さ」。そのために、現代美術作家、染色作家、伝統工芸作家という垣根を超えた、「染めに特化したSQUARE 染textile展」を今後とも続けていくことを、初代メンバー3人は第1回展の後に確認しあった。

注)

- 1) 染・清流館 世界で初めての「染色専門美術館」
2006年に「日本の染色アートを世界に向けて発信する」ことを目的として京都に設立された。京都を拠点に活躍する作家100人の作品計約500点を所蔵し、巨匠から新鋭まで様々な染色作家達の作品を展示している。
<http://somesairyu.net/>
- 2) スーパーカミオカンデ公式ホームページ
<http://www-sk.icrr.u-tokyo.ac.jp/sk/sk/neutrino.html>
- 3) JAXA 宇宙情報センター
http://spaceinfo.jaxa.jp/ja/supernova_explosion_neutron_star.html
- 4) 自然科学研究機構 国立天文台
<http://www.nao.ac.jp/news/science/2014/20140701-neutronstar.html>
- 5) 志村ふくみ
滋賀県生まれ。染織作家、随筆家。31歳のとき母の指導で植物染料と紬糸による織物を始める。重要無形文化財保持者（人間国宝）、文化功労者。著書に「一色一生」(大佛次郎賞)、「母なる色」、作品集に「織と文」、「篝火」、限定本「裂帳」、アルスシムラの教本「伝書 しむらのいろ」、洋子と共著「しむらのいろ」がある。
<https://shimuranoiro.com/>

6) 吉岡幸雄

染織史家・「染司よしおか」主宰 昭和21年 京都市生まれ。生家は江戸時代から京都で四代続く染屋である。父常雄はのちに大阪芸術大学教授として教壇に立つとともに、世界の染色研究に没頭し、とくに貝紫の研究の第一人者であった。

http://www.artbooks-shikosha.com/news/people/yoshioka_sachio.html

7) 月刊染織 *a* 2006年10月号No.307

14p～18p 特集 布物語-四人の仕事-地球の未来へ祈りを込めて 自然と美と不思議を染める 夢幻染

8) 高田洋一／Takada Yoichi (彫刻家・美術教育研究家)

1956年大阪生まれ。’79大阪芸術大学美術学科卒。’81第15回現代日本美術展／大賞。’90文化庁芸術家在外研修員（ベルリン）。和紙、竹を用い、僅かな空気の流れを捉える作品の動きが早くから注目され、内外の美術館、画廊での展覧会多数開催。兵庫県立近代美術館、富山県立近代美術館、埼玉県立近代美術館他にコレクション。’00－’10東京大学大学院総合文化研究科「科学技術インタープリター養成プログラム」特任教員。

作家活動と並行し幼稚園児、成人までを対象に美術館、学校で出前授業、ワークショップを続けている。近年、図工・美術科の時間数が削減されるなか’00年以降、より危機感をもって学校現場への取り組みを続けている。「図工・美術」に「苦手意識」を持つ子供にこそ、自尊感情、自己愛を高め、喜びを感じられるプログラム開発に取り組む。

謝辞

外部有識者として高田洋一氏の客観的コメントを本稿へ掲載するにあたり、快諾していただきましたことに深く感謝いたします。

